

# 貝の火

宮沢賢治

青空文庫



今は兎<sup>うさぎ</sup>たちは、みんなみじかい茶色の着物<sup>きもの</sup>です。

野原<sup>のほら</sup>の草はきらきら光り、あちこちの樺<sup>かば</sup>の木は白い花をつけました。

実に野原<sup>のほら</sup>はいいにおいでいっぱいす。

子<sup>こ</sup>兎<sup>うさぎ</sup>のホモイは、悦<sup>よろこ</sup>んでぴんぴん踊<sup>おど</sup>りながら申<sup>もう</sup>しました。

「ふん、いいにおいだなあ。うまいぞ、うまいぞ、鈴<sup>すずらん</sup>蘭<sup>らん</sup>なんかまるでパリパリだ」

風が来たので鈴<sup>すずらん</sup>蘭<sup>らん</sup>は、葉<sup>は</sup>や花<sup>はな</sup>を互<sup>たが</sup>いにぶつつけて、しゃりんしゃりと鳴りました。

ホモイはもううれしくて、息<sup>いき</sup>もつかずにぴよんぴよん草の上をかけ出しました。

それからホモイはちよつと立ちどまって、腕<sup>うで</sup>を組んでほくほくしながら、

「まるで僕<sup>ぼく</sup>は川の波<sup>なみ</sup>の上で芸<sup>げい</sup>当<sup>とう</sup>をしているようだぞ」と言<sup>い</sup>いました。

本当にホモイは、いつか小さな流<sup>なが</sup>れの岸<sup>きし</sup>まで来ておりました。

そこには冷<sup>つめ</sup>たい水がこぼんこぼんと音をたて、底<sup>そこ</sup>の砂<sup>すな</sup>がピカピカ光っています。

ホモイはちよつと頭<sup>たま</sup>を曲<sup>ま</sup>げて、

「この川<sup>かわ</sup>を向<sup>む</sup>こうへ跳<sup>と</sup>び越<sup>こ</sup>えてやろうかな。なあに訳<sup>わけ</sup>ないさ。けれども川<sup>かわ</sup>の向<sup>む</sup>こう側<sup>がわ</sup>は、

どうも草<sup>くさ</sup>が悪いからね」とひとりごとを言<sup>い</sup>いました。

すると不意に流れの上の方から、

「ブルルル、パイ、パイ、パイ、パイ、ブルルル、パイ、パイ、パイ、パイ、パイ」とけたたましい声がして、うす黒いもじやもじやした鳥のような形のもものが、ばたばたばたばたもがきながら、流れて参りました。

ホモイは急いで岸にかけよって、じつと待ちかまえました。

流されるのは、たしかにやせたひばりの子供です。ホモイはいきなり水の中に飛び込んで、前あしでしっかりとそれをつかまえました。

するとそのひばりの子供は、いよいよびっくりして、黄色なくちばしを大きくあけて、まるでホモイのお耳もつんぼになるくらい鳴くのです。

ホモイはあわてて一生けん命、あとあしで水をけりました。そして、

「大丈夫さ、大丈夫さ」と言いながら、その子の顔を見ますと、ホモイはぎよつとしてあぶなく手をはなしそうになりました。それは顔じゅうしわだらけで、くちばしが大きくて、おまけにどこかとかげに似ているのです。

けれどもこの強い兎の子は、決してその手をはなしませんでした。怖ろしさに口をへの字にしながらも、それをしっかりとおさえて、高く水の上にさしあげたのです。

そして二人は、どんどん流ながされました。ホモイは二度ほど波なみをかぶったので、水をよほどのみました。それでもその鳥の子ははなしませんでした。

するとちようど、小流こながれの曲まがりかどに、一本の小さな楊やなぎの枝えだが出て、水をピチャピチャたたいておりました。

ホモイはいきなりその枝えだに、青い皮かわの見えるくらい深くかみつきました。そして力いっぱいにひばりの子を岸きしの柔やわらかな草の上に投げあげて、自分も一とびにはね上がりました。ひばりの子は草の上に倒たおれて、目を白くしてガタガタ顫ふるえています。

ホモイも疲つかれでよろよろしましたが、無理むりにこらえて、楊やなぎの白い花をむしって来て、ひばりの子にかぶせてやりました。ひばりの子は、ありがとうと言うようにその鼠ねずみ色の顔かほをあげました。

ホモイはそれを見るとぞつとして、いきなり跳とび退ひきました。そして声をたてて逃にげました。

その時、空からヒユウと矢やのように降おりて来たものがあります。ホモイは立ちどまって、ふりかえって見ると、それは母親のひばりでした。母親のひばりは、物ものも言いえずにぶるぶる顫ふるえながら、子供こどものひばりを強く強く抱だいてやりました。

ホモイはもう大丈夫だいじょうぶと思つたので、いちもくさんにおとうさんのお家うちへ走つて帰りました。

兎うさぎのお母さんは、ちようど、お家で白い草の束たばをそろえておりましたが、ホモイを見てびつくりしました。そして、

「おや、どうかしたのかい。たいへん顔色わが悪いよ」と言いながら柵たなから薬くすりの箱はこをおろしました。

「おつかさん、僕ぼくね、もじやもじやの鳥の子のおぼれるのを助たすけたんです」とホモイが言いいました。

兎うさぎのお母さんは箱はこから万能散まんのうさんを一服いつぷく出してホモイに渡わたして、

「もじやもじやの鳥の子つて、ひばりかい」と尋たずねました。

ホモイは薬くすりを受けとつて、

「たぶんひばりでしょう。ああ頭あたまがぐるぐるする。おつかさん、まわりが変へんに見えるよ」と言いいながら、そのままバツタリ倒たおれてしまいました。ひどい熱ねつ病びょうにかかったのです。

\*

ホモイが、おとうさんやおつかさんや、兎うさぎのお医者いしやさんのおかげで、すっかりよくなつ

たのは、鈴蘭すずらんにみんな青い実みができたころでした。

ホモイは、ある雲のない静しずかな晩ばん、はじめてうちからちよつと出てみました。

南の空を、赤い星がしきりにななめに走りました。ホモイはうっとりそれを見とれました。すると不意ふいに、空でブルルツとはねの音がして、二疋ひきの小鳥こどりが降りて参まりました。

大きい方は、まるい赤い光るものを大だいじ事じそうに草におろして、うやうやしく手をついて申もうしました。

「ホモイさま。あなたさまは私わたしども親子の大だい恩おん人じんでございます」

ホモイは、その赤いものの光で、よくその顔を見て言いいました。

「あなた方は先せん頃ころのひばりさんですか」

母親のひばりは、

「さようでございます。先日はまことにありがとうございます。せがれの命いのちをお助たすけくございましたまことにありがとうございます。あなた様さまはそのために、ご病びょう気きにさえおなりましたとの事ことでございましたが、もうおよろしゅうございますか」

親子のひばりは、たくさんおじぎをしてまた申もうしました。

「私わたしどもは毎日この辺へんを飛とびめぐりまして、あなたさまの外そとへお出でなさいますのを待また

ちいたしておりました。これは私どもの王からの贈物おくりものでございます」と言ながら、ひばりはさっきの赤い光るものをホモイの前に出して、薄うすいうすいけむりのようなはんけちを解ときました。それはとちの実みぐらいあるまんまるの玉で、中では赤い火がちらちら燃もえているのです。

ひばりの母親がまた申しました。

「これは貝かいの火という宝珠ほうじゆでございます。王さまのお言伝ことづてではあなた様さまのお手入れしだいで、この珠たまはどんなにでも立派りっぱになると申もうします。どうかお納めおさめをねがいます」

ホモイは笑わらって言いいました。

「ひばりさん、僕ぼくはこんなものいりませんよ。持もって行ってください。たいへんきれいなもんですから、見るだけでたくさんです。見たくなったら、またあなたの所ところへ行きましよう」

ひばりが申もうしました。

「いいえ。それはどうかお納めおさめをねがいます。私どもの王からの贈物おくりものでございますから。お納めおさめくださらないと、また私はせがれと二人で切腹せつぷくをしないとなりません。させがれ。お暇いとまをして。さ。おじぎ。ご免めんくださいませ」



そしてひばりの親子は二、三遍お辞儀をして、あわてて飛んで行ってしまいました。

ホモイは玉を取りあげて見ました。玉は赤や黄の焰をあげて、せわしくせわしく燃えているように見えますが、実はやはり冷たく美しく澄んでいるのです。目にあてて空にすかして見ると、もう焰はなく、天の川が奇麗にすきとおっています。目からはなすと、またちらりちらり美しい火が燃えだします。

ホモイはそつと玉をささげて、おうちへはいりました。そしてすぐお父さんに見せました。すると兎のお父さんが玉を手にとつて、めがねをはずしてよく調べてから申しました。「これは有名な貝の火という宝物だ。これは大変な玉だぞ。これをこのまま一生満足に持つている事のできたものは今までに鳥に二人魚に一人あつただけだという話だ。お前はよく気をつけて光をなくさないようにするんだぞ」

ホモイが申しました。

「それは大丈夫ですよ。僕は決してなくしませんよ。そんなようなことは、ひばりも言っていました。僕は毎日百遍ずつ息をふきかけて百遍ずつ紅雀の毛でみがいてやりましよう」

兎のおつかさんも、玉を手にとつてよくよくながめました。そして言いました。

「この玉はたいへん損じやすいという事です。けれども、また亡くなった鷺の大 臣が持っていた時は、大噴火があつて大 臣が鳥の避難のために、あちこちさしずをして歩いてる間に、この玉が山ほどある石に打たれたり、まっかな熔岩に流されたりしても、いつこうきずも曇りもつかないでかえつて前よりも美しくなつたという話ですよ」

兎のおとうさんが申しました。

「そうだ。それは名高いはなしだ。お前もきつと鷺の大 臣のような名高い人になるだろう。よくいじわるなんかしないように気をつけないといけないぞ」

ホモイはつかれてねむくなりました。そして自分のお床にコロリと横になつて言いました。

「大丈夫だよ。僕なんかきつと立派にやるよ。玉は僕持つて寝るんだからください」

兎のおつかさんは玉を渡しました。ホモイはそれを胸にあててすぐねむつてしまいました。

その晩の夢の奇麗なことは、黄や緑の火が空で燃えたり、野原が一面黄金の草に變つたり、たくさんの小さな風車が蜂のようにかすかにうなつて空中を飛んであるいたり、仁義をそなえた鷺の大 臣が、銀色のマントをきらきら波立てて野原を見まわったり、ホ

モイはうれしさに何<sup>なんべん</sup>遍も、

「ホウ。やってるぞ、やってるぞ」と声をあげたくらいです。

\*

あくる朝、ホモイは七時ごろ目をさまして、まず第一<sup>だいいち</sup>に玉を見ました。玉の美しいことは、昨夜<sup>ゆうべ</sup>よりもつとです。ホモイは玉をのぞいて、ひとりごとを言いました。

「見える、見える。あそこが噴火<sup>ふんかこう</sup>口だ。そら火をふいた。ふいたぞ。おもしろいな。まるで花火だ。おや、おや、おや、火がもくもく湧<sup>わ</sup>いている。二つにわかれた。奇麗<sup>きれい</sup>だな。火花だ。火花だ。まるでいなすまだ。そら流れ出<sup>なが</sup>したぞ。すっかり黄金色<sup>きんいろ</sup>になってしまった。うまいぞ、うまいぞ。そらまた火をふいた」

おとうさんはもう外へ出ていました。おつかさんがにこにこして、おいしい白い草の根<sup>ね</sup>や青いばらの実<sup>み</sup>を持つて来て言いました。

「さあ早くおかおを洗<sup>あら</sup>つて、今日は少し運動<sup>うんどう</sup>をするんですよ。どれちよつとお見せ。まあ本当に奇麗<sup>きれい</sup>だね。お前がおかおを洗<sup>あら</sup>つている間おつかさんが見ていてもいいかい」

ホモイが言<sup>い</sup>いました。

「いいとも。これはうちの宝<sup>たからもの</sup>物なんだから、おつかさんのだよ」そしてホモイは立

つて家の入り口の鈴蘭の葉さきから、大粒の露を六つほど取ってすっかり顔を洗いました。

ホモイはごはんがすんでから、玉へ百遍息をふきかけ、それから百遍紅雀の毛でみがきました。そしてたいせつに紅雀のむな毛につつんで、今まで兎の遠めがねを入れておいた瑪瑙の箱にしまってお母さんにあずけました。そして外に出ました。

風が吹いて草の露がバラバラとこぼれます。つりがねそうが朝の鐘を、

「カン、カン、カンカエコ、カンコカンコカン」と鳴らしています。

ホモイはびよんびよん跳んで樺の木の下に行きました。

すると向こうから、年をとった野馬がやって参りました。ホモイは少し怖くなって戻ろうとしますと、馬はていねいにおじぎをしました。

「あなたはホモイさままでござりますか。こんど貝の火がお前さまに参られましたそうで実に祝着に存じます。あの玉がこの前獣の方に参りましてからもう千二百年たっていると申します。いや、実に私めも今朝そのおはなしを承わりまして、涙を流してござります」馬はボロボロ泣きだしました。

ホモイはあきれていましたが、馬があんまり泣くものですから、ついっぴこまれてちよ

つと鼻がせらせらしました。馬は風呂敷ぐらいある浅黄のはんけちを出して涙をふいて申しました。

「あなた様は私どもの恩人でございます。どうかくれぐれもおからだを大事になされてくだされます」そして馬はていねいにおじぎをして向こうへ歩いて行きました。

ホモイはなんだかうれいようなおかしいような気がしてぼんやり考えながら、にわとこの木の影に行きました。するとそこに若い二足の栗鼠が、仲よく白いお餅をたべておりましたがホモイの来たのを見ると、びっくりして立ちあがって急いできものえりを直し、目を白黒くして餅をのみ込もうとしたりしました。

ホモイはいつものように、

「りすさん。お早う」とあいさつをしましたが、りすは二足とも堅くなってしまつて、いつこうことばも出ませんでした。ホモイはあわてて、

「りすさん。今日もいつしよにどこか遊びに行きませんか」と言いますと、りすはとんでもないと言うように目をまん円にして顔を見合わせて、それからいきなり向こうを向いて一生けん命逃げて行つてしまいました。

ホモイはあきれてしまいました。そして顔色を変えてうちへ戻つて来て、

「おつかさん。なんだかみんな変へんなぐあいですよ。りすさんなんか、もう僕ぼくを仲間なかまはズれにしましたよ」と言いいますと兎うさぎのおつかさんが笑わらって答こたえました。

「それはそうですよ。お前はもう立派りっぱな人ひとになつたんだから、りすなんか恥はずかしいのです。ですからよく気きをつけてあとで笑わらわれないようにするんですよ」

ホモイが言いいました。

「おつかさん。それは大丈夫だいじょうぶですよ。それなら僕ぼくはもう大將たいしょうになつたんですか」  
おつかさんもうれしそうに、

「まあそうです」と申もうしました。

ホモイが悦よろこんで踊おどりあがりました。

「うまいぞ。うまいぞ。もうみんな僕ぼくのてしたなんだ。狐きつねなんかもうこわくもなんともないや。おつかさん。僕ぼくね、りすさんを少將しょうしょうにするよ。馬うまはね、馬うまは大佐たいさにしてやろうと思おもうんです」

おつかさんが笑わらいながら、

「そうだね、けれどもあんまりいばるんじやありませんよ」と申もうしました。

ホモイは、

「大丈夫ですよ。おつかさん、僕ちよつと外へ行って来ます」と言つたままぴよんと野原へ飛び出しました。するとすぐ目の前をいじわるの狐が風のように走って行きます。

ホモイはぶるぶる顫えながら思い切つて叫んでみました。

「待て。狐、僕は、大将だぞ」

狐がびつくりしてふり向いて顔色を変えて申しました。

「へい。存じております。へい、へい。何かご用でございませうか」

ホモイができるくらい威勢よく言いました。

「お前は、ずいぶん僕をいじめたな。今度は僕のけらいだぞ」

狐は卒倒しそうになつて、頭に手をあげて答えました。

「へい、お申し訳もございません。どうかお赦しをねがいます」

ホモイはうれしさにわくわくしました。

「特別に許してやろう。お前を少尉にする。よく働いてくれ」

狐が悦んで四遍ばかり廻りました。

「へいへい。ありがとう存じます。どんな事でもいただきます。少しとうもろこしを盗んで参りませうか」

ホモイが申しました。

「いや、それは悪いことだ。そんなことをしてはならん」  
 狐は頭を搔いて申しました。

「へいへい。これからは決していたしません。なんでもおいいつけを待っていたします」  
 ホモイは言いました。

「そうだ。用があつたら呼ぶからあつちへ行つておいで」狐はくるくるまわつておじぎをして向こうへ行つてしまいました。

ホモイはうれしくてたまりません。野原を行ったり来たりひとりごとを言ったり、笑つたりさまざまの楽しいことを考えているうちに、もうお日様が碎けた鏡のように樺の木の間隙に落ちましたので、ホモイも急いでおうちに帰りました。

兎のおとうさまももう帰っていて、その晩は様々のご馳走がありました。ホモイはその晩も美しい夢を見ました。

\*

次の日ホモイは、お母さんに言いつけられて箆を持って野原に出て、鈴蘭の実を集めながらひとりごとを言いました。



「ふん、大将が鈴蘭の実を集めるなんておかしいや。誰かに見つけられたらきつと笑われるばかりだ。狐が来るといいがなあ」

すると足の下がなんだかもくもくしました。見るとむぐらが土をくぐってだんだん向こうへ行こうとします。ホモイは叫びました。

「むぐら、むぐら、むぐらもち、お前は僕の偉くなったことを知ってるかい」

むぐらが土の中で言いました。

「ホモイさんでいらつしやいますか。よく存じております」

ホモイは大いばりで言いました。

「そうか。そんならいいがね。僕、お前を軍曹にするよ。そのかわり少し働いてくれ

ないかい」

むぐらはびくびくして尋ねました。

「へいどんなことでございますか」

ホモイがいきなり、

「鈴蘭の実を集めておくれ」と言いました。

むぐらは土の中で冷汗をたらして頭をかきながら、

「さあまことに恐れ入りますが私は明るい所の仕事はいつこう無調法でございましてと言いました。

ホモイはおこつてしまつて、

「そうかい。そんならいいよ。頼まないから。あとで見ておいで。ひどいよ」と叫びました。

むぐらは、

「どうかご免をねがいます。私は長くお日様を見ますと死んでしまいますので」としきりにおわびをします。

ホモイは足をばたばたして、

「いいよ。もういいよ。だまつておいで」と言いました。

その時向こうのにわとこの陰からりすが五疋ちよろちよろ出て参りました。そしてホモイの前にびよこびよこ頭を下げて申しました。

「ホモイさま、どうか私どもに鈴蘭の実をお採らせくださいませ」

ホモイが、

「いいとも。さあやってくれ。お前たちはみんな僕の少将だよ」

りすがきやつきやつ悦んで仕事にかかりました。

この時向こうから仔馬が六疋走つて来てホモイの前にとまりました。その中のいちばん大きなのが、

「ホモイ様。私どもにも何かおいいつけをねがいます」と申しました。ホモイはすつかり悦んで、

「いいとも。お前たちはみんな僕の大佐にする。僕が呼んだら、きつとかけて来ておくれ」といいました。仔馬も悦んではねあがりました。

むぐらが土の中で泣きながら申しました。

「ホモイさま、どうか私にもできるようなことをおいいつけください。きつと立派にいたしますから」

ホモイはまだおこつていましたので、

「お前なんかいらぬよ。今に狐が来たらお前たちの仲間をみんなひどい目にあわしてやるよ。見ておいで」と足ぶみをして言いました。

土の中ではひっそりとして声もなくなりました。

それからりすは、夕方までに鈴蘭の実をたくさん集めて、大騒ぎをしてホモイの

うちへ運びました。

おつかさんが、その騒ぎにびつくりして出て見て言いました。

「おや、どうしたの、りすさん」

ホモイが横から口を出して、

「おつかさん。僕の腕まえをごらん。まだまだ僕はどんな事でもできるんですよ」と言いました。兎のお母さんは返事もなく黙って考えておりました。

するとちようど兎のお父さんが戻って来て、その景色をじっと見てから申しました。

「ホモイ、お前は少し熱がありはしないか。むぐらをたいへんおどしたそうだな。むぐらの家では、もうみんなきちがいのようになって泣いてるよ。それにこんなにたくさんの実を全体誰かたべるのだ」

ホモイは泣きだしました。りすはしばらくのどくそうに立って見ておりましたが、とうとうこそこそみんな逃げてしまいました。

兎のお父さんがまた申しました。

「お前はもうだめだ。貝の火を見てごらん。きつと曇ってしまっているから」

兎のおつかさんまでが泣いて、前かけで涙をそっとぬぐいながら、あの美しい玉のはい

つた瑪瑙の函を戸棚から取り出しました。

兎のおとうさんは函を受けとつて蓋をひらいて驚きました。

珠は「昨日の晩よりも、もつともつと赤く、もつともつと速く燃えているのです。」

みんなはうつとりみとれてしまいました。兎のおとうさんはだまって玉をホモイに渡してご飯を食べはじめました。ホモイもいつか涙がかわきみんなはまた気持ちよく笑い出し、いつしよにご飯をたべてやすみました。

\*

次の朝早くホモイはまた野原に出ました。

今日もよいお天気です。けれども実をとられた鈴蘭は、もう前のようにしやりんしやりんと葉を鳴らしませんでした。

向こうの向こうの青い野原のはずれから、狐が一生けん命に走って来て、ホモイの前にとまって、

「ホモイさん。昨日りに鈴蘭の実を集めさせたそうですね。どうです。今日は私がいいいものを見つけて来てあげましょう。それは黄色でね、もくもくしてね、失敬ですが、ホモイさん、あなたなんかまだ見たこともないやつですぜ。それから、昨日むぐらに罰を

かけるとおっしゃったそうですね。あいつは元来横着だから、川の中へでも追いこんでやりましょう」と言いました。

ホモイは、

「むぐらは許しておやりよ。僕も今朝許したよ。けれどそのおいしいたべものは少しばかり持つて来てごらん」と言いました。

「合点、合点。十分間だけお待ちなさい。十分間ですぜ」と言つて狐はまるで風のように走つて行きました。

ホモイはそこで高く叫びました。

「むぐら、むぐら、むぐらもち。もうお前は許してあげるよ。泣かなくてもいいよ」土の中はしんとしておりました。

狐がまた向こうから走つて来ました。そして、

「さあおあがりなさい。これは天国の天ぶらというもんですぜ。最上等のところですよ」と言いながら盗んで来た角パンを出しました。

ホモイはちよつとたべてみたら、実にどうもうまいのです。そこで狐に、

「こんなものどの木にできるのだい」とたずねますと狐が横を向いて一つ「ヘン」と笑

つてから申しました。

「台だいどころ所という木ですよ。ダアイドコロという木ね。おいしかったら毎日持つて来て

あげましょう」

ホモイが申しました。

「それでは毎日きつと三つずつ持つて来ておくれ。ね」

狐きつねがいかにもよくのみこんだというように目をパチパチさせて言いました。

「へい。よろしゅうございます。そのかわり私の鶏とりをとるのを、あなたがとめてはいけませんよ」

「いいとも」とホモイが申しました。

すると狐きつねが、

「それでは今日の分、もう二つ持つて来ましょう」と言いながらまた風のように走って行きました。

ホモイはそれをおうちに持つて行つてお父さんやお母さんにあげる時の事ことを考えていました。

お父さんだつて、こんなおいしいものは知らないだろう。僕ぼくはほんとうに孝行こうこうだなあ。

狐が角パンを二つくわえて来てホモイの前に置いて、急いで「さよなら」と言いながらもう走って行ってしまいました。ホモイは、

「狐はいつたい毎日何をしているんだろう」とつぶやきながらおうちに帰りました。今日はお父さんとお母さんが、お家の前で鈴蘭の実を天日にほしておりました。

ホモイが、

「お父さん。いいものを持った来ましたよ。あげましようか。まあちよつとたべてごらん下さい」と言いながら角パンを出しました。

兎のお父さんはそれを受けとつて眼鏡をはずして、よくよく調べてから言いました。

「お前はこんなものを狐にもらつたな。これは盗んで来たもんだ。こんなものをおれは食べない」そしておとうさんは、も一つホモイのお母さんにあげようと持っていた分も、いきなり取りかえして自分のといっしよに土に投げつけてむちやくちやにふみにじつてしまいました。

ホモイはわつと泣きだしました。兎のお母さんもいっしよに泣きました。

お父さんがあちこち歩きながら、

「ホモイ、お前はもう駄目だ。玉を見てごらん。もうきつと砕けているから」と言いま



した。

お母さんが泣きながら函を出しました。玉はお日さまの光を受けて、まるで天上に昇つて行きそうに美しく燃えました。

お父さんは玉をホモイに渡してだまってしまいました。ホモイも玉を見ていつか涙を忘れてしまいました。

\*

次の日ホモイはまた野原に出ました。

狐が走つて来てすぐ角パンを三つ渡しました。ホモイはそれを急いで台所の棚の上に乗せてまた野原に来ますと狐がまだ待つていて言いました。

「ホモイさん。何かおもしろいことをしようじやありませんか」ホモイが、

「どんなこと？」とききますと狐が言いました。

「むぐらを罰にするのはどうです。あいつは実にこの野原の毒むしですぜ。そしてなまけものですぜ。あなたが一遍許すつて言ったのなら、今日は私だけでひとつむぐらをいじめますから、あなたはだまって見ておいでなさい。いいでしょう」

ホモイは、

「うん、毒どくむしなら少しいじめてもよからう」と言いました。

狐きつねは、しばらくあちこち地面じめんを嗅かいだり、とんとんふんでみたりしていましたが、とうとう一つの大きな石を起おこしました。するとその下にむぐらの親子が八疋びきかたまつてぶるぶるえておりました。狐きつねが、

「さあ、走れ、走らないと、噛かみ殺ころすぞ」といつて足をどんどんしました。むぐらの親子は、

「ごめんください。ごめんください」と言いながら逃にげようとするのですが、みんな目が見えない上に足がきかないものですからただ草を搔かくだけです。

いちばん小さな子はもうあおむけになつて気絶きぜつしたようです。狐きつねははがみをしました。ホモイも思わず、

「シツシツ」と言いつて足を鳴なりました。その時、

「こらっ、何をする」と言いう大きな声こゑがして、狐きつねがくるくると四遍へんばかりまわつて、やがていちもくさんに逃にげました。

見るとホモイのお父さんが来ているのです。

お父さんは、急いそいでむぐらをみんな穴あなに入れてやって、上へもとのように石をのせて、

それからホモイの首すじをつかんで、ぐんぐんおうちへ引いて行きました。

おつかさんが出て来て泣いておとうさんにすがりました。お父さんが言いました。

「ホモイ。お前はもう駄目だぞ。今日こそ貝の火は砕けたぞ。出して見ろ」

お母さんが涙をふきながら函を出して来ました。お父さんは函の蓋を開いて見ました。

するとお父さんはびつくりしてしまいました。貝の火が今日ぐらい美しいことはまだあ

りませんでした。それはまるで赤や緑や青や様々の火がはげしく戦争をして、地雷火

をかけた、のろしを上げたり、またいなすまがひらめいたり、光の血が流れたり、そう

かと思うと水色の焰が玉の全体をパツと占領して、今度はひなげしの花や、黄色の

チュウリップ、薔薇やほたるかずらなどが、一面風にゆらいだりしているように見える

のです。

兎のお父さんは黙って玉をホモイに渡しました。ホモイはまもなく涙も忘れて貝の火を

ながめてよろこびました。

おつかさんもやつと安心して、おひるのしたくをしました。

みんなはすわって角パンをたべました。

お父さんが言いました。

「ホモイ。狐には気をつけないといけないぞ」

ホモイが申しました。

「お父さん、大丈夫ですよ。狐なんかなんでもありませんよ。僕には貝の火があるのですもの。あの玉が砕けたり曇つたりするもんですか」

お母さんが申しました。

「本当にね、いい宝石だね」

ホモイは得意になつて言いました。

「お母さん。僕はね、生まれつきあの貝の火と離れないようになってるんですよ。たとえば僕がどんな事をしたって、あの貝の火がどこかへ飛んで行くなんで、そんな事があるもんですか。それに僕毎日百ずつ息をかけてみがくんですもの」

「実際 そうだといいがな」とお父さんが申しました。

その晩ホモイは夢を見ました。高い高い錐のような山の頂上に片脚で立っているのです。

ホモイはびっくりして泣いて目をさました。

\*

次の朝ホモイはまた野に出ました。

今日は陰気な霧がジメジメ降っています。木も草もじつと黙り込みました。ぶなの木さへ葉をちらつとも動かしません。

ただあのつりがねそうの朝の鐘だけは高く高く空にひびきました。

「カン、カン、カンカエコ、カンコカンコカン」おしまいの音がカアンと向こうから戻って来ました。

そして狐が角パンを三つ持って半ズボンをはいてやって来ました。

「狐。お早う」とホモイが言いました。

狐はいやな笑いようをしながら、

「いや昨日はびつくりしましたぜ。ホモイさんのお父さんもずいぶんがんですな。しかしどうです。すぐご機嫌が直ったでしょう。今日は一つうんとおもしろいことをやりましょう。動物園をあなたはきらいですか」と言いました。

ホモイが、

「うん。きらいではない」と申しました。

狐が懐から小さな網を出しました。そして、

「そら、こいつをかけておくと、とんぼでも蜂でも雀でも、かけずでも、もつと大きなやつでもひっかかりませぬ。それを集めて一つ動物園をやろうじやありませんか」と言いました。

ホモイはちよつとその動物園の景色を考えてみて、たまらなくおもしろくなりました。そこで、

「やろう。けれども、大丈夫その網でとれるかい」と言いました。

狐がいかにもおかしそうにして、

「大丈夫ですとも。あなたは早くパンを置いておいでなさい。そのうちに私はもう百ぐらいは集めておきますから」と言いました。

ホモイは、急いで角パンを取ってお家に帰って、台所の棚の上に載せて、また急いで帰って来ました。

見るともう狐は霧の中の樺の木に、すっかり網をかけて、口を大きくあけて笑っています。

「はははは、ご覧なさい。もう四疋つかまりましたよ」  
狐はどこから持って来たか大きな硝子箱を指さして言いました。

本当にその中には、かけすと鶯と紅雀と、ひわと、四疋はいつてばたばたしており  
ました。

けれどもホモイの顔を見ると、みんな急に安心したように静まりました。  
鶯が硝子越しに申しました。

「ホモイさん。どうかあなたのお力で助けてやってください。私らは狐につかまったの  
です。あしたはきつと食われます。お願いでございます。ホモイさん」

ホモイはすぐ箱を開こうとしました。  
すると、狐が額に黒い皺をよせて、眼を釣りあげてどなりました。

「ホモイ。気をつけろ。その箱に手でもかけてみる。食い殺すぞ。泥棒め」  
まるで口が横に裂けそうです。

ホモイはこわくなってしまって、いちもくさんにおうちへ帰りました。今日はおつかさ  
んも野原に出て、うちにいませんでした。

ホモイはあまり胸がどきどきするので、あの貝の火を見ようと函を出して蓋を開きまし  
た。

それはやはり火のように燃えておりました。けれども気のせいか、一ひとつ所ところ小さな小さ

な針はりでついたくらいくもの白い曇りが見えるのです。

ホモイはどうもそれが気になってしかたありませんでした。そこでいつものように、フツツと息いきをかけて、紅べにすずめ雀むなげの胸毛むなげで上を軽くかるこすりました。

けれども、どうもそれがとれないのです。その時、お父さんが帰って来ました。そしてホモイの顔色かが変わっているのを見て言いいました。

「ホモイ。貝かいの火くもが曇ったのか。たいへんお前の顔色わが悪いよ。どれお見せ」そして玉たまをすかして見て笑わらって言いいました。

「なあに、すぐ除とれるよ。黄色の火なんか、かえって今までよりよけい燃もえているくらいだ。どれ、紅べにすずめ雀むなげの毛を少しおくれ」そしてお父さんは熱心ねっしんにみがきはじめました。けれどもどうも曇りくもがとれるどころかだんだん大きくなるらしいのです。

お母さんが帰まって参まりました。そして黙だまってお父さんから貝かいの火を受け取とって、すかして見てため息いきについて今度こんどは自分で息いきをかけてみがきました。

実じつにみんな、だまってため息いきばかりつきながら、かわるがわる一生けん命めいがいたのです。

もう夕方ゆうがたになりました。お父さんは、にわかにわかに気がついたように立ちあがって、



「まあご飯を食べよう。今夜一晩油に漬けておいてみる。それがいちばんいいという話だ」といいました。お母さんはびつくりして、

「まあ、ご飯のしたくを忘れていた。なんにもこさえてない。一昨日のすすらの実と今朝の角パンだけをたべましょうか」と言いました。

「うんそれでいいさ」とお父さんがいいました。ホモイはため息をついて玉を函に入れてじつとそれを見つめました。

みんなは、だまつてご飯をすましました。

お父さんは、

「どれ油を出してやるかな」と言いながら棚からかやの実の油の瓶をおろしました。

ホモイはそれを受けとつて貝の火を入れた函に注ぎました。そしてあかりをけしてみんな早くからねてしまいました。

\*

夜中にホモイは眼をさしました。

そしてこわごわ起きあがって、そつと枕もとの貝の火を見ました。貝の火は、油の中で魚の眼玉のように銀色に光っています。もう赤い火は燃えていませんでした。

ホモイは大声で泣き出しました。

兎のお父さんやお母さんがびっくりして起きてあかりをつけました。

貝の火はまるで鉛の玉のようになっていきます。ホモイは泣きながら狐の網のはなしをお父さんにしました。

お父さんはたいへんあわてて急いで着物をきかえながら言いました。

「ホモイ。お前は馬鹿だぞ。俺も馬鹿だった。お前はひばりの子供の命を助けてあの玉をもらったのじゃないか。それをお前は一昨日なんか生まれつきだなんて言っていた。さあ、野原へ行こう。狐がまだ網を張っているかもしれない。お前はいのちがけで狐とたたかうんだぞ。もちろんおれも手伝う」

ホモイは泣いて立ちあがりました。兎のお母さんも泣いて二人のあとを追いしました。

霧がポシャポシャ降って、もう夜があけかかっています。

狐はまだ網をかけて、樺の木の下にいました。そして三人を見て口を曲げて大声でわらいました。ホモイのお父さんが叫びました。

「狐。お前はよくもホモイをだましたな。さあ決闘をしろ」

狐が実に悪党らしい顔をして言いました。

「へん。貴様ら三疋ばかり食い殺してやってもいいが、俺もけがでもするとつまらないや。おれはもつといい食べものがあるんだ」

そして函をかついで逃げ出そうとしました。

「待てこら」とホモイのお父さんがガラスの箱を押えたので、狐はよろよろして、とうとう函を置いたまま逃げて行つてしまいました。

見ると箱の中に鳥が百疋ばかり、みんな泣いていました。雀や、かけすや、うぐいすはもちろん、大きな大きな梟や、それに、ひばりの親子までがはいっているのです。

ホモイのお父さんは蓋をあけました。

鳥がみんな飛び出して地面に手をついて声をそろえて言いました。

「ありがとうございます。ほんとうにたびたびおかげ様でございます」

するとホモイのお父さんが申しました。

「どういたしましたして、私どもは面目次第もございません。あなた方の王さまからいただいた玉をとうとう曇らしてしまつたのです」

鳥が一遍に言いました。

「まあどうしたのでしょうか。どうかちよつと拝見いたしたいものです」

「さあどうぞ」と言いながらホモイのお父さんは、みんなをおうちの方へ案内しました。鳥はぞろぞろついて行きました。ホモイはみんなのあとを泣きながらしよんぼりついて行きました。梟が大腿おおもたにのつそのつそと歩きながら時々こわい眼めをしてホモイをふりかえつて見ました。

みんなはおうちにはいりました。

鳥は、ゆかや棚たなや机つくえや、うちじゅうのあらゆる場所ばしょをふさぎました。梟が目玉ぶくろうを途方とほうもない方むに向けながら、しきりに「オホン、オホン」とせきばらいをします。

ホモイのお父さんがただの白い石になってしまった貝かいの火を取りあげて、

「もうこんなぐあいです。どうかたくさん笑わらつてやってください」と言うのとたん、貝かいの火は鋭するどくカチツと鳴つて二つに割われました。

と思うと、パチパチパチツとはげしい音がして見る見るまるで煙けむりのように砕くだけました。

ホモイが入口いりぐちでアツと言いつて倒たおれました。目にその粉こながはいったのです。みんなは驚おどろいてそつちへ行いこうとしますと、今度はそこらにピチピチと音がして煙けむりがだんだん集あつまり、やがて立派りっぱなくつかのかけらになり、おしまいにカタツと二つかけらが組み合つて、すつかり昔むかしの貝かいの火になりました。玉はまるで噴火ふんかのように燃もえ、夕日ゆうひのようにかがやき、

ヒューと音を立てて窓から外の方へ飛んで行きました。

鳥はみんな興をさまして、一人去り二人去り今はふくろうだけになりました。ふくろうはじろじろ室の中を見まわしながら、

「たつた六日だつたな。ホッホ

たつた六日だつたな。ホッホ」

とあざ笑つて、肩をゆすぶつて大股に出て行きました。

それにホモイの目は、もうさっきの玉のように白く濁つてしまつて、まったく物が見えなくなつたのです。

はじめからおしまいまでお母さんは泣いてばかりおりました。お父さんが腕を組んでじつと考えていましたが、やがてホモイのせなかを静かにたたいて言いました。

「泣くな。こんなことはどこにもあるのだ。それをよくわかつたお前は、いちばんさいわいなのだ。目はきつとまたよくなる。お父さんがよくしてやるから。な。泣くな」

窓の外では霧が晴れて鈴蘭の葉がきらきら光り、つりがねそうは、

「カン、カン、カンカエコ、カンコカンコカン」と朝の鐘を高く鳴らしました。



## 青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日初版発行

1991（平成3）年6月10日65刷

底本の親本：「第二次宮沢賢治全集 第十卷」筑摩書房

1969（昭和44）年初版発行

入力：ゆかい

校正：林 幸雄

2001年2月15日公開

2011年3月25日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 貝の火

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>